

第4回 教育再生会議 議事要旨

日 時：平成18年12月21日(木) 9:30～11:00

場 所：官邸大会議室(4階)

出席者：安倍内閣総理大臣、塩崎官房長官、伊吹文部科学大臣、下村官房副長官、鈴木官房副長官、池坊文部科学副大臣、山谷総理大臣補佐官、有識者16名

(野依座長)

ただいまから第4回教育再生会議を開会させていただく。委員の皆様方におかれましては、ご多忙のところご出席賜り、大変ありがたく思っている。

教育再生会議としての第1次報告を1月に取りまとめることとしており、本日はこの第1次報告の骨子案について御審議いただきたい。この骨子案は、これまでの総会での議論、合宿審議を含めた分科会での議論などを踏まえて、委員の皆様の見解を伺いながら、とりまとめたもの。第1次報告案は、当面の課題に焦点を絞り、できるだけ簡潔に、国民の皆様に分かりやすい形でまとめることを心がけた。事務局からこの骨子案について説明していただく。

(山谷総理大臣補佐官)

事務局では、すべての委員の方の見解を書いたペーパーを作り、議事録をチェックし、精査している。しかし、力不足だったり、多岐に渡るご意見であったり、またページ数の制約の関係で、ご意見を十分に反映しきれていない部分もあると感じている。今日も議論をいただいて、とりまとめていきたい。今日は柱立てが中心で、具体的な提言内容については事柄のみのもの。これで決定ではなく、来月の第1次提言が国民の皆さんに納得していただける、希望をもっていただける骨太な提言になるように、ご意見をいただきたい。

会議の位置付けだが、これまでの閣議決定などを踏まえつつ、幅広い視野から議論していただければありがたい。ここでの提言は総理のご判断をいただき、関係省庁のご協力をいただきながら、法改正が必要なものや予算などは国会審議を経て実現される。

事務局より、第1次報告の骨子案について説明

(野依座長)

第1次報告の骨子案についてご意見を頂戴したい。まずは各分科会の主査の方からご発言いただきたい。

(池田座長代理)

骨子案の(2)と(5)が第2分科会が中心となって議論している部分。規範意識を子供たちに身に付けさせるための方策について、アクションオリエンテッドで議論している。私達の思いは、社会総がかりということ。また、多様性の導入ということである。社会総がかりという形で各論を論じている。学校、家庭、地域社会、企業・産業界のそれぞれの役割、使命を明確にする。同時に責任を果たしていただく体制が必要。今後はより細かくブレイクダウンして要望していく必要があるのではと考えている。そのためには、国民一人ひとりが当事者意識を持つことが重要。それぞれの立場で教育再生に参画していただくためへの教育再生会議としての要望、強いメッセージが必要だと感じる。また、我々一人ひとりも不退転で使命と責任を果たす意思表示、決意表明が併せて必要。第1次報告は強いメッセージ性が必要。

(白石委員)

今日の骨子案はこれまでの議論や合宿審議の内容と大きく乖離しているとの印象を持たれる方もおられるのでは。大切なポイントが落ちているし、具体的なこともややトーンダウン。例えばゆとり教育を見直すとの明確なメッセージも無難になっている。総理も教育が最重要課題とおっしゃっている。それに応えて、問題の解決のために大胆な議論をするのがこの場ではないか。それと今日の骨子案は乖離している。いじめや学校の格差、未履修の問題などの短期的な国民の関心事や課題に解を用意できていない。もっと自由闊達に議論し、それを国会で受けて議論してもらえればと思う。内容についての補足はなし。

(川勝委員)

第3分科会は教育再生の理念とその方向性。理念については改正教育基本法に述べられていることに尽き、あえて屋上屋を加える必要は無い。当面の課題に絞った1次案には賛同。しかし、第3分科会で議論したことは伝統を継承して新しい文化を創造することである。新しい文化を現時点で受け止めるならば、これが美しい国づくりに尽きていると思う。そこにどのように教育再生の理念を落とし込むか。

もう1つは、国際競争力。これは座長の希望でもある。今回の第1次報告案は初等中等教育に集中したもの。高等教育では頭脳獲得競争、いかに国際競争力を付けるかに配慮が必要。国際競争力を付ける事については、6・3・3・4に加えてX(エックス)があり、大学院についても留意しなければならない。プロジェクトXとして考えようと話し合われた。国際競争力を付けるためには、

国際的な通念にあわせた制度も考えなければならない。例えば、9月入学も検討項目として議論していただいた。さらに留学生に関して、日本で行う高等教育は内外の学生のため行なう、内外の区別はしないという、魅力ある教育立国を出口に考える。

その中で初等中等をどうするかを考えると「社会総がかりで教育改革を」の部分でトップを持っていくべき。今まで教育は教育者に委ねられていたことへの反省が社会総がかりということ。企業、地域コミュニティーすべてが子供の教育に関わる。そのために自己も教育しなければならないということで、生涯教育が入ってくる。社会総がかりが一番の基礎。その次に教師。「恩師に出会える学校」が2番目に来る。それが我々の議論の帰結ではないか。そして、そこで何を教えるのかというものが入ってくる。基本的学力、規範意識を教えなければならない。そして最後に責任ある学校、教育委員会などの評価、管理の部分がそれに応じて出てくる。

教える内容であるが、美しい国をつくるためには己の国・郷土についての知識や理解がないといけない。社会、歴史、文化に関わるものについては深く地に根ざしたものでないといけない。そうして初めて、地域総がかりで教えることができる。教える内容の中にふるさと学、郷土学が必要。地に着いた、日本発の学問をやる、それが地域おこし、国おこしになり、国際競争力を持つ国に繋がる。そういう流れの中で、この1次試案に物語性、起承転結がつけられて組み替えられれば、我々の意図は十分に反映されると思う。

(野依座長)

理念の問題と、どういう問題を解決するのかと、またメッセージ性を持たないといけない、ということでなかなか難しい問題を含んでいると思う。

(小野委員)

今までの審議会の後追いではいけない。この再生会議は国民に対してははっきりしたメッセージを出す必要があると思う。国民は教育界の綺麗ごと、いじめを隠したり、校内暴力隠したり、未履修があったり、悪平等の教育などを直さないといけないと思っている。そのためにはもっとはっきりとしたメッセージで、骨太の改革のための意見を出さないといけないと思っている。

しかし、事務局が各方面に配慮した、マイルドな提言になっている。これではインパクトが少ない。例えば、ゆとり教育を見直すとはっきり書くべき。ゆとり教育が全部悪いわけではないが、ゆとり教育の誤ったメッセージを再生会議がはっきり変えて、国民のためになる学校にしないといけないということを表して欲しいと思う。

(浅利委員)

小野委員のご意見にほとんどの方がうなずかれています。私もまったく同感。何故ストレートな意見が事務局にまわると中和されてしまうのか。この会議の根本的な問題を考える必要がある。安倍総理は教育をひとつの重要な課題として、国民にアピールしている。新しい総理がどういう姿勢を見せるか国民は見ているのだ。

何で中和されるか調べてみた。一つは与党に対する配慮、もう一つは文部科学省に対する配慮、あるいは日教組に対する配慮。それが委員の意見よりも優先されている。ところが国会では伊吹文科大臣が、再生会議では自由に意見を述べていただいて結構、それを法律的にどうするかは国会の専門家の問題。それを行政としてどうするかは行政の問題とはっきり言われている。我々は国会や行政に配慮して甘い意見を出すべきではない。それを事務局はどうして理解しないのか。昨日数名の委員と相談したが、ゆとり教育は見直した方がいいと言っている。またいじめの問題も、もっと明快に、いじめは許さないという意見を出している。「いじめられている子供を全力で守る、いじめている側の子供には厳しく対処し、その行為の愚かさを認識させる。繰り返し暴力を振るう子供にはやむを得ない場合、出席停止制度を適応する」というものを事務局に出した。なのにこの骨子には反映されていない。それであれば、また教育再生は官僚と議員でやられたらいいではないか。民間の委員が意見を言う必要はない。教育委員会についても同じ。「教育委員会は見直す。学校教育を開かれたものにし、その責任体制を確立し、教育委員会の存在意義を抜本的に問い直す。広域的な形の教育委員会の再編成を行い、効率化する」と提案し事務局に送ったが、反映されていない。当たり障りのない意見になっているこういう事務局の姿勢は、安倍総理にとってもマイナスになると思う。内閣総理大臣、官房長官、文部科学大臣も委員になっているので、現実無視の答申は困るという意見もあったが、それでは委員達の自由な意見は反映されない。

(葛西委員)

項目的に見ると整理されて分かりやすくまとまっていると思う。(1)から(5)の骨子は議論のポイントを抑えている。文章の書き方としては、ゆとり教育を見直すということをはっきり書いた方がいいと思う。また、いじめの対処策も具体的に書いた方がいい。教育委員会制度についても踏み込んだ具体的な意見を出した方がいい。しかし、骨子をまとめるということでは、これくらいでまとめておいて、後は本文が出来る時までに詰めておくのでいいと思う。骨子の段階で踏み込んだものを出すと争点がそこに集中してしまい、戦術的に

は得ではない。情報管理が出来る仕組みとタイミングの中で、最後に整理して出すというのがいいのではないか。1次案の骨子は今の時点ではこれくらいで整理しておいていいと思う。

2番目に川勝委員の意見について。私はメッセージ性、インパクトを強くするためにはまず何をやるかということが先に来べきと思う。学力向上、安心な教室を先に出して、そのために必要な手立てとして先生の問題あるいは教育委員会の問題、教育そのものの問題ときて、さらにより大きく社会全体で考えようという様に具体論から総論に広がっていく構成がいい。最初に総論をもつてくると焦点がぼける。

骨子の文言について3点。「詰め込み教育には逆戻りさせない」とあるが、詰め込み教育をやる、と行政が指導したことはないはず。詰め込み教育という言葉は、行政を批判する側が作った言葉であるから、この言葉を使うのは良くない。「知識の詰め込みにとどまらないよう留意する」といった言葉で、ポジティブに書いた方がいいのでは。恩師に会える学校のところで、「優れた教員を採用し、教育現場の多様化と専門性向上を図る」とあるが、「優れた教員」が抽象的なので、「専門的知識と人間力の高い優れた教師」と具体化した方がいい。「教育現場の多様化」というところは、何を意味するのか良く分からない。「専門性向上」も教える内容についての知識を意味しているのか、教える技術を意味しているのか判然としない。「教育現場の多様な要請に対応するように図る」として、専門性という言葉は優れた教員の資質のところに入れた方が意味ははっきりする。あと、今後検討すべきことの中で、「入口重視から出口重視へ」と書いてあるが、AからBへの単純な対置法ではなく、「入口重視のみならず、出口も重視する」とした方がいい。

(野依座長)

委員のコンセンサスとして、社会総がかりはキーワード。順序を前にするか後にするのだが、タイトルとして社会総がかりとなっているので、これでいいのでは。表現は検討していきたい。

(中嶋委員)

事務局がまとめるに際して、安倍総理の「美しい国へ」のメッセージ、国会での演説、第1回総会での「開かれた国」というメッセージ、そういうロマンのある文章が消えているのが残念。骨太というのはそういうこと。まとめについて、安倍総理の書かれたものを座右に置いて、見ながら文章を書いていたけるといい。

教育は孟子の「教えて、これを育てる」から出ている。これはまさに詰め込

み。この骨子では詰め込み教育がいかに悪いが、になっているが、本当は暗記と繰り返しによって型を学ぶということがなくなったから崩壊していると言える。詰め込み教育が言葉として誤解を招くのであれば、考える必要があるが。

9月入学についても安倍総理のメッセージとしてあった。グローバルスタンダードにあわせるという意味だけではない。3月卒業から9月までの5ヶ月間の使い方によって意味がでる。3月まで高校生らしい勉強をして、それから受験勉強をしても十分間に合う、その間にボランティア、社会奉仕をしたり、海外での経験をしたりすることはとても大事。そういうことを出すことによって、高等教育が良くなる。それらのことを含めて抜本的にまとめ方を考えた方がいい。

(門川委員)

「社会総がかり」で子供たちを育むことが一番大事。また、学力向上の取組は急務。そのため、教育内容の充実、授業時数を増加することも必要。しかし、学校だけでは限界があり、家庭での学習も大切。しかし現実には、家庭での学習時間は極端に少ない。これでは学力はつかない。生活規律をきちんとさせ、自学自習の習慣や家庭学習を定着させなければいけない。親にしっかりそのことを示す必要がある。

次に、感謝の心が骨子案にないのが気になる。「恩師に出会える学校」はいいと思う。同時に教育者が尊ばれる社会を作ろう、ということも入れていただきたい。大量採用の時代を迎えるが、教師を一方向的に非難し揶揄するのでは優秀な人材は確保できない。また、そのために、大学の教員養成もやるべきことを徹底してやることも必要。

関連して、教員の評価、学校評価は徹底してやり、公開し、その評価には親の評価、子供の授業満足度評価も入れるべきだと思し、京都では実施している。しかし教師の資質や指導力そのものを親や子供が直接評価することは駄目だと思う。客観性が担保できず危険である。親に対して「家庭での子供の指導をどうしていますか」、また子供に対して、「きちんと授業をうけていますか」と問いかけもした上で、双方の振り返りも含めて教師の授業力も評価してもらおう。学校評価、外部評価は大事。しかし、いやなことでも親や子供にしっかり示すことができる教師が求められている。何年か後に、「いい先生だった」と評価される。教師とはそういうもの。「子供と先生は同格」との主張もあるが、それはいかなものか。あくまで教員評価にとってそれは参考、ということをお願いしたい。

次に、リーダーを育てることは大事だが、同時に、落ちこぼれを作らないことも大事。格差が社会問題になっているが、両方に軸足を置いて、全体を引き

上げるよう取り組むべきである。

（渡邊委員）

この第1次案を発表するのは反対。これまでの話し合いが十分に網羅されていないと思うから。この会議は総理に対する提案会議と認識している。例えば、総理の9月入学についてどうかということに対して、積極的に話し合いをし、全員が9月入学賛成、大学のあり方、について見直していこうという話し合いをしたにもかかわらず、そのことについてまったく書いていないのは、意図的な恣意的な作文とを感じる。このようなものを発表しても、我々がやったことは何も国民に伝わらない。それならば、この会議を公開にしてはどうか。公開にした上で総理、国会が判断されるとしたらどうか。提案会議なので、この段階で言葉を削られるのは間違っていると思う。

（陰山委員）

公開については賛成。マスコミ関係者にいろいろ聞かれて気を使うので、公開してしまった方がいいと思う、いい議論をしているので。

一次報告に当たっては、理念的なものを優先させるべき。例えば、9月入学について基本的に賛成だが、懸念はかなりある。このことは国民的に議論をして、さらに国会で揉んでいただかないと責任が持てない。社会総がかりと問題は投げかけても、社会全体で話し合っていないと総がかりには実質ならない。戦略的なステップを踏むことが重要と思う。

また、実証的に問題に即したことが提言されないといけない。ゆとり教育は激増する不登校にあたって、ゆとりの概念を提示したものの。実際、ゆとり教育が導入されたことによって、不登校の急増は止まった。しかし、一度打った政策は副作用をもたらす、つまり不登校は止まるけれど、今度は学力低下がおきる。授業時間増加としたら、また不登校が増えると思う。現状をきちんと精査して、具体的な手を打っていかないといけない。問題がおきるところに批判的に入っていくと、違うところにひずみができる恐れがある。強烈的な政策には副作用があるということも考えないといけない。理念を述べて、国民的な議論をおこし、具体的な手立てに落とし込んでいくという方が成功すると思う。

（品川委員）

議論された事柄が全体的に薄まって出されてきているのが残念。自分が報道すると考えたとき、過去に出された提言とどこが違うのかという印象を持つ。タイトルには社会総がかりとあり、それはすごくいいのだが、この骨子案では具体性に欠け、総がかりな感じが伝わらないのではないかと。1月の一次報告で

は、まずグランドデザインを出していくことが大事だと考える。その際、我々が子どもたちを教育するときのゴールを明確にすべきだと思う。どういう子どもたちを育てていきたいのか、その子たちにどういうふう生きて欲しいのか、どうなって欲しいのかということをも文化化する必要があるのではないか。この骨子を読んだとき、再生会議はエリートな子だけを視野に入れているのではないかという印象を持たれかねないと危惧した。勉強ができないとかできても学校になじまないとか不登校になったり、非行に走ったりするような子どもたちのこともちゃんと考えているという印象を受けない。すべての子どもを、個々の認知と学習スタイルのニーズに応じ、かつその将来の進路を見据えて教育していくということをも文化することが必要。調査によれば、今の日本の中学生で自分に生きる価値があると思っているのは8.8%しかいない。自分は何をやってもだめだと思う高校生は64%もいる。教育を語る時、そういう現状を考えていかなければならない。だからこそ、子どもの視点に立った提案にしたい。アメリカやイギリスやフィンランドの教育がいいのは、すべての子どもをドロップアウトさせないという姿勢をはっきりと打ち出したからだ。この会議の報告書も、ぜひ、この視点を言語化して欲しい。

(小宮山委員)

書き方については、この報告が何なのかという位置づけによるが、そこについての合意は出来ていないと思う。議論もなされていない。教育委員会について、大いに問題があるということではほとんどの方が合意されていると思うが、見直すのか、廃止するのか、そこは分からない。ゆとり教育も、問題があり見直すことは多くの方が合意されたと思うが、時間数を増やすのかというと、少なくとも私は合意していない。この骨子案は方向性とグランドデザインを示すもので、具体的な対応は今後議論する、ということだと思う。一方でいじめ、未履修などの問題について短期の対応が必要なら、それはそれとしてやるということ。教育再生はグランドデザイン無しにあり得ないのではないか。

また、「国際水準」という言葉があるが、これは途上国の発想だと思う。スタンダードなら分かるが、それほど日本の教育は遅れていないと思う。

(小谷委員)

「社会総がかりで教育再生を」というのは第1次報告のタイトルとしてはいいが、一般の人にとっては国が何とかしてくれると思えるのではないか。自分が何とかしなければという気持ちにならないと思う。子供たちに尊敬されるような大人社会を作りましょう、といったタイトルをつけた方が、まず自分が親としてやらなければならないという意識を持てると思う。一般の方に直接届く

ようなメッセージも付け加えていただくといいと思う。

（海老名委員）

学校入学前の子育て、親の教育について触れていただけたらと思う。乳幼児の教育、入学前の教育は大切なことだと思う。戦後育てられた親が、今子育てをしているが、学校に上がる前の段階での子育ての失敗があると思う。親が学び直す必要がある。就学前の子育てについて、もっと親が勉強し、学ぶということを入れていただけたらと思う。

（義家委員）

学校教育が果たす責任は何なのか。ここについて共通認識が必要。多くの親、先生は子供たちの人生に責任を負おうとしていると思う。教育は子供たちの成長に責任を負っているということをしっかり確認すべき。そういう前提であれば、成長は抵抗の中でしか成り立たないので、勉強、学習、ハードルを効果的に与えることが必要。しかし現状は高校入試など見ても、まったく試験というハードルをくぐらずに社会に出ている子供もたくさんいる。その子たちが社会に出ると、常にハードルの中で結果を残さなければならないので、挫折し、ニートになっていく。また、最近は塾の通学率が高くなり、学校の教師は宿題を出さなくなったと言われている。塾で大変だから宿題を出さない。その辺りのことも今後考えていかなければならない。子供たちに効果的な抵抗、愛ある抵抗をどう与えていくかについて具体的なことを示す必要がある。この原案は抽象的な感じはするが、答えを焦るのは危険だと思う。何としても成し遂げなければならないものがあるならば、そこには慎重さが必要だと思う。

（伊吹文部科学大臣）

教育基本法が約60年ぶりに改正された。この教育基本法の理念と皆様からのご意見を基に安倍総理が決断していく、そのためにこの会議をお願いしているという理解でいいと思う。また、現在予算編成が進んでいるが、安倍内閣は、教育を最優先の課題と位置づけているので、政策経費としては約4%くらいの増を確保している。ただ、良き教師にどのような優遇措置を講じていくかについてはまだまだ議論が煮詰まっていない状態。

この会議は安倍総理へいろいろ助言、アドバイスをさせていただく会議ということでもいいと思う。従って、法律があろうと、閣議決定があろうと、それを超える議論を率直にさせていただかなければこの会の存在意義はないし、委員の方をお願いしていることも失礼になる。ただ同時に皆様がおっしゃったことがそのままできる、という誤解だけは解いておいて頂きたい。現実を忘れては政策

はできない、しかし理想を持っていなければ政策をやる値打ちはない。その理想を語っていただければと思う。国会で、という話が出ているが、国会で議論するためには、行政権を持っている内閣が国会に法案を出さなければならない。陰山委員がおっしゃるように、何かを達成すると必ず副作用がある。教育委員会は今のままでは決していいとは思わないが、教育委員会をやめて教育の行政権をどうするのか、自治体の長に持たせるのか。自治体の長は選挙で選ばれて、いろんな方がいるがどうなるのか、それを考えないといけない。この会議の在り方としては、皆様に骨太な理念を大いに語っていただいて、安倍総理がその理念に沿って行政を指導しながら、国会等に対応していくというのがいいのではと思う。必ず、あることを直そうとすると、副作用がある、そのバランスを考えていかなければならない。

また、教育には効率の視点が欠けていると思う。市場原理という言葉は適切でないと思うが、国民の税金を預かって、義務教育に10兆円のお金を投じている以上、効率的に使う意識がないと駄目。今は効率は供給する側の努力ではなく、需要する側によって保たれている。その効率の維持のためにはフェアネスを持っていないといけない。どこが効率のフェアネスを維持していくのかを考えると、今の教育は責任の所在が明らかではない。ここに筋を通した上で考えていかないと、結局は上手くいかないと思う。

(小宮山委員)

我々は理想だけ語るのではないと思う。我々も現場をよく知っている。理想も書くけれども、最後にはグランドデザインの中身も提案するつもりで会議に参加している。

(浅利委員)

教育委員会について。私の意見は次の通り。教育委員会の存在意義を抜本的に問い直す。教育委員会は必ずしも組織として機能しているとは言えない。教育委員会の責任体制の確立に向けての第一歩として、国、教育委員会は以下の取組を進める必要がある。地域の教育にしっかりと責任を負い、住民にきちんと説明を行なう。教育委員会の統廃合を行なって広範囲に事務を進めるようにする。教育委員会の外部評価制度を導入することを検討する。こういった具体的な議論が出ている。具体的でないと言うのはおかしい。

もう1つは、運営委員が中心になって、草案を作り、それを事務局がまとめるとした方がいい。

マスコミ対応について。彼らも必死、ある程度この中身が外に出るのはしかたないという前提に立って、中をきちんとすべき。

また、企業、スポンサーは有害情報について責任を持つように書きたいと申し上げてきたが、全く取り上げられていない。

(葛西委員)

1回目の会議で総理からアサインメントが出ている。安全な学校と学力をつけることと、社会規範意識を持たせること。その方向に向かって、タイムスケジュールという制約もある中で、色々な意見の中から共通の部分を取り出して、第1回目のものとして出すことにしないと、せっかくのマスコミの関心を逆方向に動かしてしまうだろう。まとめて共通項を出すべきだと思う。

グランドデザインから入る進め方、すなわち総論から各論へという進め方は、いままでのやり方と同じ。1月に出すものは具体的でないといけないと思う。いつ、誰が、どこで、何を、いつまでにやるかをきちんと示さなければならぬと思う。社会総がかりというタイトルは、「誰が」という責任を曖昧にしてしまう。社会総がかりは一番先に出すべきものではなく、誰がいつまでに何をするかについて具体性のある提言を列記した後で、「さはさりながら社会全体が関心を共有し、総がかりで対処する気構えが必要」という風に展開させるのが良い。

(野依座長)

いろいろな意見が出ている。理念はしっかりしないといけない。一方で、早急に解決すべきものもある。そういうことをとりまとめて、メッセージ性の強い1次案を作らなければならない。プロセスについてはどうすればいいか。

(山谷総理大臣補佐官)

今日幅広いご意見をいただいた。1月のとりまとめは、当面緊急に取り組むこと、また総理の演説にもある、基礎学力の向上、心を養い、規範意識をつくる事、それを社会総がかりでやっていくこと、というのは共通認識だと思う。表現やメッセージ性の部分を揉み直し、皆様にお示しし、ご了承いただければと思う。如何か。

(野依座長)

そのとりまとめは運営委員会でさせていただく。次の総会では、成案に近いものを出させていただく。それまでに様々なご意見を賜りたいと思う。是非ご協力いただきたい。最後に安倍総理から一言いただく。

(安倍内閣総理大臣)

皆様にはお忙しい中にも関わらず、合宿も含めて相当長時間にわたって、ご議論をいただいた。今日も活発なご議論をいただき感謝。

皆様のご意見はそれぞれ大変貴重だと思う。同時にこれを取りまとめるのは大変な作業ではあるが、長時間ご議論をいただければ、ここというところに収斂していくと信じている。

理念、グランドデザイン、さらにある程度の具体的な目標と検討課題をやはり入れていただきたい。それを元に我々は法律改正すべきは法律を改正し、指導要領で応えるべきはそうしたところで応え、またあるいは予算の拡充等充当等において対応していく。

先の国会において、59年ぶりに教育基本法が改正された。新しい教育再生に向かっての理念と原則が確立された、いわば礎ができた。これから教育再生はスタートしていくことになる。

すべての子供たちに、高い水準の学力と規範意識を身につける機会を提供していく、それを基本にお願いしたい。

優れた恩師に会う、先生に会うということは極めて重要。がんばった先生が報われる仕組みに、また問題のある先生にも対応する。それは、がんばっている先生が自らに誇りを持って、多くの国民から子供たちから尊敬される先生になっていくということにつながると確信している。

また、教育委員会のあり方については、この国会でもずいぶん議論になった。関与のあり方や責任の所在等々課題がある。この問題についても、さらに掘り下げてご議論をいただきたい。

また、大変この会議に関心が高いため、外部への対応等で皆様にはご苦勞をいただいていると思うが、ぜひこの後は第一次のとりまとめに向かってご議論を深め、成案を得ていただきたいと思うので、よろしくお願いしたい。

以上